

道徳性の発達に関する研究 (4)

佐藤 公代

(教育心理学教室)

(平成13年5月24日受理)

Study on the Moral Development (4)

Kimiyo SATOU

(問題と目的)

佐藤 (1999, 2000) の「文章の違いによる大学生の道徳判断について」の研究では、「ねつ造」と「窃盗」を取り上げ、コールバークの発達段階と文章の違いによる大学生の道徳判断との関連で考察した。今回は、「覚醒剤」の記事を取り上げて考察する。

(方 法)

- 1) 期日：2000年6月
- 2) 被験者：E 大学1-4回生 216名
- 3) 材料：覚醒剤の新聞記事
- 4) 手続き：「薬屋の課題」を用いて、コールバークの発達段階に区分して、クロス集計をする。記事を読んでもらい、読み終えたら回収し、質問に答えてもらう。
- 5) 結果の処理方法
イ、自由再生：詳細に書かれたもの-3点、大体書かれたもの-2点、1行位で単純に書かれたもの-1点。
ロ、理解度：記事の違い方、悪い印象を持たれた方の記事についての理由、予想される人間像、犯罪者のその後の生き方。
仮説は次の通りである。
(1) 大学生はコールバークの発達水準の4段階に位置するだろう。
(2) 同じ事件でも、文章の違いによって印象は変わるであろう。

(結果と考察)

表1に悪い印象の記事を取り上げた人数とその割合を示す。

表1 悪い印象の記事を取り上げた人数とその割合

	男		女		計	
	人数(人)	%	人数(人)	%	人数(人)	%
イ	40	40	51	44	91	42
ロ	33	33	45	39	78	36
ハ	27	27	20	17	47	22
計	100	100	116	100	216	100

(注) イ：朝日新聞 ロ：愛媛新聞 ハ：どちらも同じ

表1から、男女とも、朝日新聞を取り上げた方が多かった。(男：40%，女：44%)

その理由として、朝日新聞の方は、事実だけが簡略に書かれてあり、愛媛新聞の方は、容疑者の動機やコメントがのせてあり、詳細に書かれてある、という意見が大半を占めていた。

表2にコールバーク6段階の人数分布を示す。

表2から男女とも4段階に位置する人が多かった。

自由再生の採点に際して、全員が「大体書かれたもの」(2点)になっていたため、新聞記事の違いからは何も生じないとして処理した。

表2 コールバーク6段階の人数分布

	男		女		計	
	人数(人)	%	人数(人)	%	人数(人)	%
a	0	0	0	0	0	0
b	7	7	4	3.4	11	5
c	1	1	2	1.7	3	1
d	3	3	10	8.5	13	6
e	5	5	2	1.7	7	3
f	4	4	1	0.9	5	2
g	47	47	40	34	87	40
h	10	10	19	16	29	13
i	4	4	1	0.9	5	2
j	5	5	17	15	22	10
k	7	7	7	6	14	6
l	4	4	13	11	17	8
なし	3	3	1	0.9	4	2
計	100	46	117	54	217	100

(注) a：1段階の賛成 b：1段階の反対 c：2段階の賛成 d：2段階の反対
 e：3段階の賛成 f：3段階の反対 g：4段階の賛成 h：4段階の反対
 i：5段階の賛成 j：5段階の反対 k：6段階の賛成 l：6段階の反対
 なしと答えたもの

表３ 犯罪者がその後どのように生きているかの想像回答

	男			女			計	計	計
	イ	ロ	ハ	イ	ロ	ハ			
1	17 (17)	6 (6)	12 (12)	18 (16)	6 (5)	6 (5)	35 (16)	12 (6)	18 (8)
2	14 (14)	20 (20)	11 (11)	33 (28.4)	32 (27.6)	12 (10)	47 (22)	52 (24)	23 (11)
3	7 (7)	5 (5)	2 (2)	3 (2.6)	4 (3.4)	1 (0.9)	10 (5)	9 (4)	3 (1)
4	2 (2)	2 (2)	2 (2)	1 (0.9)	0 (0)	0 (0)	3 (1.4)	2 (0.9)	2 (0.9)
計	40 (40)	33 (33)	27 (27)	55 (47)	42 (36)	19 (16)	95 (44)	75 (35)	46 (21)

(注) ()は% 1：更正する。 2：厳しい人生を送る。 3：再犯する。 4：想像つかない。

理解度に関しての予想される人間像について、朝日新聞の方は、真面目で優等生タイプ、愛媛新聞の方は、意志の強い人間として読みとれる、と書いた人は大半を占めていた。

表３に犯罪者がその後どのように生きているかの想像回答を示す。

表３から「厳しい人生を送る」>「更正する」の回答が多い。朝日新聞より愛媛新聞の方に回答が多かった理由として、後者の記事からは詳細さがみられ、意志の強い人間として読みとれる観点から「厳しい人生にも立ち向かっていける」と想像したのであろう。

仮説（１）、（２）とも、支持される結果となった。

（今後の課題）

- （１）「道徳判断」を「道徳行為」に結びつけさせるスキルの問題
- （２）道徳判断の性差の問題
- （３）実生活に結び付く道徳的ジレンマの課題
- （４）理論と実践との統一を道徳問題で考える

（参考文献）

各文献に掲載されている文献を省略する。

1. 佐藤公代 1999 道徳性の発達に関する研究（１）－文章の違いによる大学生の道徳判断について－ 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第46巻第1号 19-24頁
2. 佐藤公代 2000 道徳性の発達に関する研究（２） 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第47巻第1号 33-40頁
3. 佐藤公代 2000 道徳性の発達に関する研究（３） 愛媛大学教育学部紀要 第1部 教育科学 第47巻第1号 41-45頁

（注）

被験者の皆様には、大変お世話になりました。心より感謝致します。